

比較の眼差しを多少とも持つことになり、それが豊かさを支えたと指摘する。以上のような研究作業上の地域枠、方法論的地理領域として、「東南アジア」は、社会や文化の研究にとっても重要であろう。

では、主として人類学の若手研究者たちによる本書の意義は何だろうか。一つには、特定地域に関する新鮮な視点からの考察が、人類学の視座を東南アジア地域研究にもたらすと同時に、人類学にとっても資するものとなっている点である。さらに特筆すべき点は、著者たちが、東南アジアにおける、或は、国家におけるマイノリティを主な研究対象とし、フィールドワークをしていることにより、世界地図によって想像されるような安定調和的な東南アジア像や世界像とは異なる、現代世界を生きる人びとの動的なリアリティに迫るものとなっている点である。私を印象付けた「勢い」は、これに由来しているといえよう。

最後に、序章を含め全16章のうち、女性によって書かれたのは、女性を論じた章を含め計2章であることを指摘しておく。

(青木恵理子・龍谷大学社会学部)

参考文献

アンダーソン、ベネディクト。2005。『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介他（訳）。東京：作品社。（原著 Anderson, Benedict. 1998. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*. London and New York: Verso.）

山本信人（監修・編著）。『東南アジア地域研究入門 3政治』慶應義塾大学出版会，2017，xvi+321p.

東南アジアの政治を学ぶための日本語のスタンディ・ガイドの出版が最近増えている [例えば、岩崎 2017; 清水他 2018; 中野他 2016; 中村 2012]。本書はその喜ばしい潮流のうちの1つであり、「東南アジア地域研究の軌跡をたどりながら、東南アジア地域研究の現状とゆくえについて考え」(p. ii) するために編集された3冊のうちの「政治」編であ

る。内容は東南アジア政治研究の系譜を概観する序章と、それに続く4つの部からなる。各部は1章1テーマを扱っている3から5の章で構成され、それぞれの章を若手・中堅の気鋭の研究者が執筆している。各部の構成は以下のとおりである。第1部「時空を超える地域」では、時間（第1章）、空間（第2章）、境域（第3章）というテーマが取り上げられている。第2部「国民国家からみる地域」では、政治変動（第4章）、統治（第5章）、政治と軍（第6章）、政治経済（第7章）、地方（第8章）に関する研究が紹介されている。第3部「連携する地域」においては、地域機構（第9章）、非伝統的安全保障（第10章）、市民社会（第11章）の各テーマが検討され、第4部「越境する地域」では、宗教（第12章）、紛争（第13章）、移行期正義（第14章）という章が設けられている。

本書が想定する読者層は、「卒業論文のテーマに苦慮している学部専門課程の学生、東南アジア地域研究を極めようと志している大学院生、東南アジア地域研究の現状とゆくえに関心を持つ社会人やメディア関係者」(p. vii) で、大学専門課程学生から研究者までの層をターゲットとしている。それに合わせ、各章の記述内容は（章によりばらつきはあるが）事象の説明よりも研究解題に対しより多くの紙幅が費やされている。前掲の類似の入門書がほとんど日本語の参考文献しか掲載しておらず、初学者を念頭においた作りになっているのに比べると、本書では主に外国語文献を紹介しており、ここで紹介されている研究を踏み台にして新しい研究を行いたい人向けの著作と位置付けられる。

本書評では、「東南アジア地域研究の見取り図」(p. vi) の提示という本書の目的に則した評価を試みたい。まず、本書の第1の特長は、編者が述べるように「通常は歴史学や人類学の領域と類別されるようなテーマ設定」と「国際関係論や比較政治学的なテーマを織り交ぜ」(p. 22) ているところにあると言える。一般的に、東南アジア政治の教科書的な著作には3つのタイプがある。各国ごとにその政治的特徴を紹介するもの [清水他 2018]、歴史の流れの中で東南アジア諸国をあわせて記述するもの [岩崎 2017; 中野他 2016]、そして、分析

テーマごとに東南アジア各国を横断する形で研究蓄積を紹介するもの [中村 2012; Kuhonta *et al.* 2008] である。本書は3つめのタイプに属している。

とりわけ、本書第1部、第3部、第4部に配置されている章の多くが伝統的な政治学のテーマ「ではない」点が本書の特徴である。例えば第1部の場合、第1章では主に植民地期の歴史認識の変化を、第2章では「東南アジア」という地域が1つの空間として認識されるようになる過程を、第3章では王権国家や近代国民国家の周縁地域の人々の暮らしを紹介している。これらは政治学の教科書では通常取り上げられない問題設定であり、東南アジア政治をより広い観点から理解する上で非常に有用であろう。

本書の第2の特長として、東南アジア政治研究の軌跡を「地域研究的に跡づける」(p. 22) 試みをしている点があげられる。類似の研究解題書がアメリカやヨーロッパ出身の研究者の著作を主に紹介する傾向があるのに対し [例えば Kuhonta *et al.* 2008], 本書では東南アジア諸国出身の研究者が自国の政治を分析した研究や、日本出身の研究者が長年の現地調査を重ねた上での研究を多く紹介しようとしている。どの程度この試みが実行されているかは章により異なるが、北米・ヨーロッパ出身の研究者が行う研究の方がメインストリームの媒体に掲載されやすい傾向があるなかで、多様なバックグラウンドをもつ研究者、特に東南アジア現地の研究者の研究を知る機会が貴重である。欲張りなことを言わせてもらうなら、各章の執筆者はそれぞれ東南アジア地域のうちのある国の政治を専門としているので、国ごとに章を構成した方が現地研究者による研究の紹介がより充実したものになったのではないだろうか。

本書は上記のような点を魅力とする一方で、政治学が伝統的に研究してきたテーマに割く割合が少なく、これは短所とも言えるかもしれない。政治学の伝統的テーマは主に第2部に割り当てられ、ここでは「政治変動」「統治」「政治と軍」「政治経済」「地方」の5テーマが設定されている。これら5つのうち特に「統治」「政治経済」は分析射程が広く、その研究蓄積を1章の分量でまとめることは適切でないように思われる。また第2部の各章

の間では重複した内容の記述が散見する。これは、紹介すべき研究がともすればオーバーラップするテーマ設定となっていることに起因するからであろう。そのかわり、伝統的かつ蓄積の厚い政治学のテーマである選挙や政党といったテーマを扱う章は設けられていない。これらは政治学・比較政治学の教科書ではほぼ必ず含まれるテーマであり、東南アジアの政治研究を俯瞰する上でも1章を割くに十分な量の研究蓄積が存在するのではないかと評者には思われる。

研究状況の見取り図作成と並ぶ本書の目的が、東南アジア地域研究の「ゆくえんについて考え」(p. ii) ることである。この点に関しては、各章の執筆者がそれぞれの検討テーマの研究蓄積をふまえた上で様々な提案を行っている。例えば、フィールドワークと歴史分析を組み合わせる、一国研究にとられない広域の問題に関する研究課題の設定、東南アジア出身の研究者や研究機関との協力 (p. 134)、政策研究との対話 (p. 232) などで、いずれも妥当なものと言えらる。

これらに加え、評者としては、東南アジア地域研究が「開かれた」ものとなることを今後の方向性の1つとなることを願いたい。ここでの「開かれた」の意味は、地域研究は隣接のディシプリン(ここでは特に、世界各国の政治に対し理論的統合をめざす形で分析する政治学の一分野である比較政治学)とは相容れないとする態度をとるのではなく、ディシプリン系学問の研究動向にもアンテナを張っておく、ということである。評者自身は地域的には東南アジアを専門とする比較政治学の研究者というスタンスだが、そのような目線で東南アジア地域研究者の政治分析を読む際、「東南アジアに固有なもの」として分析されている事象が、ラテンアメリカなど他の地域でも問題になっていたり、理論的観点からの分析が進んでいたりすることが往々にしてある。本書における例としては、「民主化前後の統治エリートの継続性」(p. 115) がそれにあたり、この現象はラテンアメリカにおいてもみられ、理論的研究が進んでいる [例えば Gibson 2012]。東南アジアで起こっている興味深い現象が他地域でも起こっているのか、起こっているとしたらどのように同じなのか(あるいは違

うのか) という視点で研究を進めることは、東南アジア政治の相対化だけでなく東南アジア発の理論的知見を他地域の研究者に発信する可能性にもつながるであろう。この他、比較政治学で使用されている基本用語や定量的な分析を適切に理解していないと思われる部分が本書では散見されたが、そうした点を改善することも東南アジア政治研究を前進させる上で重要であるだろう。なぜなら、同じ学術用語をばらばらな意味で使用しては、学術共同体としての知見の蓄積が進まないからである。

日本に暮らす学生や研究者が、東南アジア諸国で起こっている現象を追うだけでなくその他の地域にも目を向け、方法論研究の進展を学ぶことは、時間や研究環境の制約上容易なことではないだろう。しかしながら、東南アジア政治を他地域との比較で相対的・多角的に分析することは、東南アジアそのものをより良く理解することに繋がるであろうし、同時に、より広範囲の読者を獲得することにも貢献するであろう。本書やその他のスタディ・ガイドがより多くの人を東南アジア政治研究にいざなうことを願いたい。

(粕谷祐子・慶應義塾大学法学部)

参考文献

- 岩崎育夫. 2017. 『入門東南アジア近現代史』東京：講談社。
- Gibson, Edward. 2012. *Boundary Control: Subnational Authoritarianism in Federal Democracies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kuhonta, Erik Martizez; Slater, Dan; and Vu, Tuong, eds. 2008. *Southeast Asia in Political Science: Theory, Region, and Qualitative Analysis*. Palo Alto: Stanford University Press.
- 中村正志 (編). 2012. 『東南アジアの比較政治学』千葉：日本貿易振興会アジア経済研究所。
- 中野亜里；遠藤 聡；小高 泰；玉置充子；増原綾子. 2016. 『入門東南アジア現代政治史』東京：福村出版。
- 清水一史；田村慶子；横山豪志 (編著). 2018. 『東南アジア現代政治入門』東京：ミネルヴァ書房。

関 恒樹. 『社会的なもの』の人類学——フィリピンのグローバル化と開発にみるつながりの諸相』明石書店, 2017, 331p.

本書を紹介するにあたって、あとがきに触れることから始めることを、お許しいただきたい。1998年、フィリピン独立100周年を記念するTシャツに「I CAN DO ANYTHING!: I SURVIVED」という文言が印刷されていた、というのだ。100年ものあいだ、スペイン、アメリカ、日本による占領、クーデター、戒厳令、ピナツボ山噴火などを生き抜いた。だから私(フィリピン人)にできないことは何もない! という、フィリピン人お得意のウィットが効いた自虐ギャグである。外からの憐れみのまなざしを吹き飛ばすどころか、尊敬の念にすら変えてしまう力強さ。それはどこから来るのか。著者同様、わたし自身、毎回フィリピンを訪れるたびに魅了されてきた。本書はそれを、人びとがネオリベラリズムの引き起こすリスクに直面するごとに紡いできたつながりの諸相、つまり「社会的なもの」のなかに探そうとする。「社会的なもの」とは、「一方でフォーマルな制度として、他方でインフォーマルな人と人との多様なつながり」(p. 8) であると説明される。

1980年代以降、フィリピンはネオリベラリズムの影響をまともに受けてきた。世界銀行とIMFのイニシアティブによる構造調整は、貿易自由化、税制改革、公共部門の合理化(民営化および金融制度改革)、その他の市場指向政策(各種規制緩和)の分野に及んだ[浅野 1993: 293]。農生産物、基本的生活用品、保健サービスなどへの補助金は減らされ、国の歳出の重点は対外債務返済におかれるようになった[Parreñas 2005: 15]。構造調整が労働市場の不安定化、学校教育の質の低下、保健サービスの不足を招き、これらの恩恵を受けていた中産階級を海外労働へと駆り立てたのである[ibid.: 22]。

社会を流動化させ、特に貧困層に打撃を与えたネオリベラリズムの負の側面を指摘する研究は多数ある。これに対し、本書が目にするのは、それを生き抜いてきた人びとの生活実践だ。それを理解する枠組として用いるのが「ネオリベラルな統